



DIABLO
LORD OF HATRED

悪夢の翼の上で

アドレオナ



短編小説

作: JONATHAN MABERRY

ストーリー

JONATHAN MABERRY

イラスト

KIRSEEL

編集

MEGAN WALKER

デザイン

SOPHIE ERB

アートディレクション

ALEX CRESWICK

ロア・コンサルテーション

IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション

MATT BURNS, CASSIEL CHADWICK,
CHLOE FRABONI, ZAVEN HAROUTUNIAN,
DAVID LOMELI

プロダクション

HANNAH MATTISON, BRIANNE MESSINA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA, TRACY WANG



Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、
米国またはその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるか、
架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、
場所に類似するものがあつたとしても、それはまったくの偶然です。

Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、
それらに対する一切の責任も負いません。



今こそ、この神託者の女王の声に耳を傾けよ。現在、過去、そして未来を知るのが私の役目だ。

夢は眠れる精神の入口だ。眠れる精神は闇深き場所であり、窓を砕き、道を封鎖しても、真実の侵入を阻むことはできない。

夢の中で我々は計画し、希望を抱き、考え、信じる...そしてあらゆる葛藤を解決し、自らの秘密を全て解き明かした時、我々は目を覚ます。

見よ、万物がその信念に歓喜している。まるで夢を抱いた夢想家の旋律がその意思を顕現させるかのようだ。

だが、夢の中で真実が明らかになるわけではない。真実は、蜘蛛の巣が張る悪夢の廊下で発見の時を待ちわびているのだ。

しかし、それには代償が伴う。

そう、大きな代償が...





アドレオナ

アドレオナは、槍の嵐の中で道を切り開き、慰めを見出すことに人生の大半を捧げた。そして今、戦士と女王として、ついに鋼鉄と血がもたらしたものを手に入れている。

平和だ。

彼女が自分の街を歩いていると、海風が優しくその顔に触れた。人々は彼女を見ると動きを止めて、感謝を伝えるために、頭を下げ、そして笑顔を見せた。

人々は女王を愛し、女王は彼らを愛していた。酒場では女王の勇気を称える歌が歌われた。女王は歩きながら、自分の槍の重さを感じた。それは初めてではなかった。まるで鉛のようだ。時間が彼女に忍び寄っていた。時間は女王の体を衰えさせ、まるで月明かりの杖のように手に馴染んでいた槍に重さを与えていた。

少女が市場の屋台から飛び出してきた。少女は桃色の手で大事そうに抱えていた、大きく熟れた美味しそうなリンゴをアドレオナに差し出した。

「敬愛すべき、えっと、女王様への贈り物？」と少女は、愛らしく言葉を詰まらせながら言った。

アドレオナは身をかがめてそれを受け取り、名残惜しそうに祝福を与えると、リンゴを一噛みし、その少女の自尊心と喜びを享受した。

歩いて宮殿に戻り始めると、心臓がその軽快さを徐々に失っていった。一歩進むごとにほかの部分が痛み、自らの王国のために支払った多くの代償を彼女に思い出させた。歴代の女王たちもこの重みを感じていたのだろうか？

女王は早めに自室に戻り、睡眠薬を飲むと、その疑問が隅に追い払われることを願いながら、長い眠りに落ちた。



そして、夢は入口となり、女王はそこから闇深き地へと向かった。

遠くから、彼女を呼ぶシールドマトロンの声が聞こえる。その経験豊かな将校の声は恐怖に満ちていた。その声が女王を警戒させた。

「どうした？」

「我が女王よ」とシールドマトロンは悲痛な声を上げ、部屋の外のバルコニーを示した。「夜の帳に紛れながら奴らが現れました」

奴ら。

アドレオナはバルコニーから身を乗り出すと、湾を埋め尽くすものを恐る恐る凝視した。帆だ。数十。いや、数百か。燃える頭蓋骨の紋章が描かれた黒い大三角帆。

「海賊です、我が女王」と、その兵士は息継ぎをせずに言った。

「いや」とアドレオナは答える。「あれは海賊ではない…」

「では何者なのです？あの船は死の旗を掲げています。ご命令を。会いに行くべきでしょうか？それとも… 嵐から避難しているのでしょうか？ただそれだけ？嵐が過ぎるまで様子を見ているのかもしれませんが」

アドレオナは首を振った。彼女の舌はまだしゃべることをためらっていた。

もしこの兵士の言うことが正しければ、外交的な駆け引きは無用だ。その名を口に出せ、と彼女は自分に言った。実直さは昔から彼女の大きな強みの1つだった。真実を歪めず、繕うこともない。あれは奴の船団だ。

死が彼女の港に訪れたのだ。

わかっている、その名を言えなかった。自分の頭の中でさえも。

女王は振り返ると隊長の肩に触れた。「街を封鎖せよ。皆に知らせろ、だが騒ぎ立てるな。目立たないように行動しながら、皆に槍を持たせろ。急げ！」

シールドマトロンは一瞬呆然とすると、踵を返して走り出し、部下たちに怒鳴りながら命じた。

アドレオナに鎧を着せるために補佐官たちが部屋に現れると、女王は直立し、両手を左右に伸ばした。部品が取りつけられるにつれて、その顔は険しくなっていた。すね当て、ガントレット、次は胸当てと兜。そして槍。

女王から女王へと受け継がれてきた、スコヴォスの強大なる棘。その刃は血に染まっている。アドレオナ自身もこの武器で、数々の人間と怪物、そして兵士や悪魔を葬ってきた。

鎧を着け終わると、女王は大股で部屋から出て、螺旋階段を降りた。女王の軍が待っていた。その槍はいつものように銀色に輝いている。

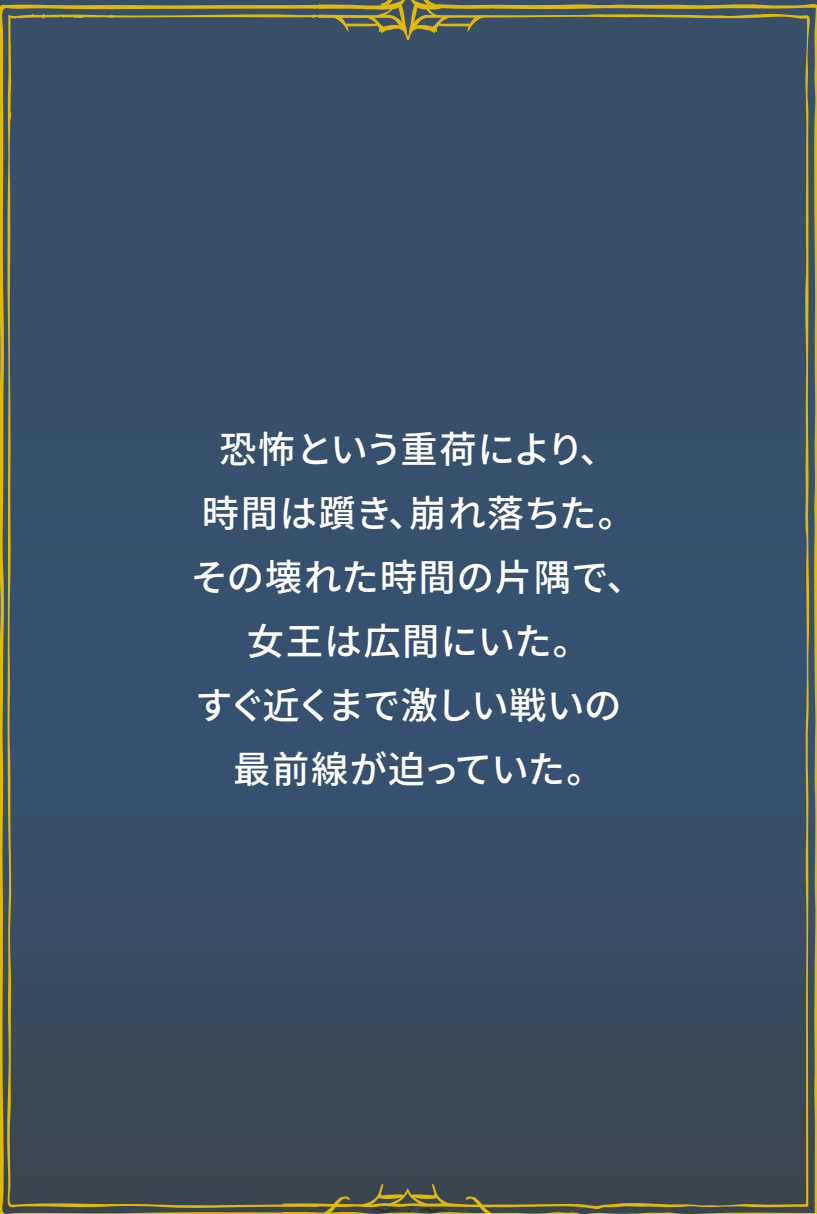
アドレオナは兵に向かってうなずいた。

「我らは包囲されている」と彼女は言った。「敵の慈悲は期待するな。容赦しないだろう。奴らの目的は征服ではなく、殲滅だ」

女王はこの国のあらゆる人と物を示した。

「死が訪れたのだ、我が姉妹たちよ」と女王は険しい顔で言った。「アマゾネスの血の一滴に至るまで、奴らに思い知らせよ」

これは大昔の戦で使われた古い言葉だった。だが、その言葉が、若いスピアメイトンたちを鼓舞し、その瞳に炎を灯したことは明らかだった。



恐怖という重荷により、
時間は躓き、崩れ落ちた。
その壊れた時間の片隅で、
女王は広間にいた。
すぐ近くまで激しい戦いの
最前線が迫っていた。

ところがいざ槍を構えてみると、高位の隊長たちがやや不安そうな表情が浮かべた。女王が槍に振り回され、鎧のせいで動きづらそうにしていることに気づいたのだ。隊長たちは顔面を蒼白にしながらも、必死に集中力を高めていた。

兵士たちは一斉に敵と衝突した。

恐怖という重荷により、時間は躓き、崩れ落ちた。その壊れた時間の片隅で、女王は広間にいた。すぐ近くまで激しい戦いの最前線が迫っていた。それは一瞬だった。だが、アドレオナはいつものように四肢の痛みを感じていた。

それは数時間戦ったあとの痛みだった。

腕は重く、その槍は柄まで血に染まっていたが、それはどこか鈍くて扱いつらかった。長すぎる。重すぎる。持ち手にすら違和感を覚えていた。

女王の周りでは、鋼鉄と炎の戦いが激しさを増していた。

もちろん肉体もだ。

女王の周囲に積み重ねられた死体はどれも完全ではなく、切り刻まれて真紅の悪夢に変貌していた。女王は鎧に燃える頭蓋骨の紋章のついた、黒い服の船員たちを探した。そこには大量の船員がいた。だが、敵の死体よりもアマゾネスの死体の数が多かった。

圧倒的に多く。彼女の戦士たちは戦うために生まれた。その全員が血の湖を渡り歩いていた。なぜこうなってしまった？間違っている。まさに狂気だ。アドレオナは自分の世界が崩れ落ちるのを感じた。

戦いの喧噪が彼女の耳を半分閉ざしていた。女王は聴力...あるいは五感を失いつつあった。その思考力も揺らぎ始めていた。

熟練の戦士である隊長の1人が地面に跪き、その腹に刻まれた大きな傷を抑えていた。彼女は奇妙かつ困惑した表情で女王を見上げた。

「女王、なぜです？」彼女は問いただすように言った。「なぜ攻撃したのですか？」

「何の話だ...？」とアドレオナは聞いた。

「彼らはただ通り過ぎようとしただけなのに。なぜ我々は...」質問を言い終わる前に、隊長は息絶えた。

アドレオナはよろめきながら下がり、振り返ると、地面には残酷に切り刻まれた多くの血染めのアマゾネスが転がっていた。

その時、アドレオナを影が覆った。振り返った女王の視線の先には、黒い服を着た男がいた。その胸には紋章が刻まれていた。すでに近くにいたアドレオナは、その紋章が、朝日を顔に浴びながら飛翔するペリカンであることがすぐにわかった。憎悪を煽る殺人者ではなく、商人だ。



彼の握るシミターから血が滴り落ち、その顔は怒りに染まりながらも、傷つき、困惑していた。

「アドレオナ女王」と彼は言った。「なぜこんなことを？我々はただ... 商品売りにきただけだ。それなのに突然襲われた。道理が通らない。あなたはかつて強く、公平で偉大な女王だった。何があった？時を重ねて理性を失ってしまったのか？」

女王は手に持つ槍を見下ろすと、恐怖に悲鳴を上げた。柄は壊れ、刃はへこみ、欠けている。だがそれ以上に驚いたのが、それを握っている手が衰え、すっかり老いていたことだった。衰えた手。戦士のものではない。

「我々は友好的だった、だがあなたは戦争を選んだ」とその船員は怒鳴った。「となれば戦うしかない。この国に平和がなく、戦争しか与えられないのであれば、我々は必要なことをやるだけだ。我々が先に血を流した、だが最後に血を流すのは我々ではない」

「違う...私は...」

「何も聞きたくない」と彼は言うと、武器を振りかぶった。「あなたは戦争を強要し、民を裏切った。民の血の一滴に至るまであなたの責任だ。スコヴォスは今や反逆者の街だ。この街を焼き払わねばならない。あなたの島々は嵐のように洗い流され、この悪魔は根源から消し去られるだろう。あなたは女王の器ではない、弱く、歪だ。我々が歴史のページから消去する」

アドレオナはよろめきながら後退し、折れた槍を持ち上げようとした。彼女の周りでは、アマゾネスたちが地に伏していた。彼女たちは死の間際にありながらも、希望を失った、非難の眼差しを女王に向けた。彼女たちは女王の名を口にした。だが、それは鼓舞ではなく、愛からでもなかった。それは呪いの声だった。女王は民への責任を果たせず、誰もが女王を呪いながら死んでいった。

その槍はあまりに重く、それを高く掲げたとしても、その一撃を弾けるほどの力はなかった。シミターが体に突き刺さり、悲鳴を上げながら彼女は目を覚ました。アドレオナはベッドから落ちかけていた。心臓が早鐘を打ち、喉が必死に空気を求めている。

彼女は身をよじって窓のほうを見た。風に揺れるカーテンを通して陽光が差し込んできている。女王は頭を傾けて耳を澄ました。

悲鳴は聞こえない。剣が盾にぶつかる音もしない。断末魔も聞こえない。

「ただの...」と彼女は喘ぎながら体の向きを変えた。「夢だ」

だが物音がし、彼女は再び顔を上げた。カラスが窓台にとまり、羽をはためかせていた。年老いて、翼は薄くなっており、その目は女王とその向こう側を見ていた。そ

の目はまるで、あらゆる恐怖、あらゆる秘密、あらゆる凶兆の断片を宿しているようだった。

「まさか…」と彼女はつぶやいた。

カラスはただ、その底知れぬ闇深い目で彼女を見つめるだけだった。



これでわかっただろう。

学者も女王も戦士も、自らの魂の本当の所有者ではない。知識の結果からは誰からも逃れられないのだ。誰もが自分たちがなしてきたことに苦しめられている。あらゆる選択が、我々を今ある道へと導いてきたのだ。正しさを確信した時でさえ、決断を下すたびに、それはまるで刃物のように突き刺さる。その傷口から希望が流れ落ち、我々は純粋さを失う。傷を負うたびに、自らの肉と血が腐敗していくのだ。

だが…

一部の者はその精神をそう簡単には汚染されない。その善悪を… 誰が判断できるだろうか？

私は自分の夢… 自分の悪夢から目覚める。この目が恐怖から視線を逸らしても、私には今も見えている。私は今も理解している。言葉が私の口からこぼれ落ちる。

「何かが来る」と私は言う。そして外の木々の中で、数千の鳥が恐怖し、ざわめいている。「何か恐ろしいものが… 近づいている…」

著者略歴

JONATHAN MABERRYは、Bram Stoker Awardを5回、Scribe Awardを4回、Inkpot Awardの受賞歴があるNew York Timesのベストセラー作家であり、これまでに50以上の小説を発表し、30の傑作選の編集にも携わっている。また、コミックの著者でもあり、詩人、エグゼクティブプロデューサー、執筆技術の指導者としても活躍中。『V-Wars』シリーズはNetflixのオリジナルドラマになっており、彼の小説『Rot & Ruin』は現在、Alcon Entertainmentによって映画化が進められている。また、スリラー小説の『Joe Ledger』は、『John Wick』シリーズを手がけたChad Stahelski監督の指揮のもと、TVドラマとしての放送も予定されている。ホラー、SF、ファンタジー、アドベンチャー、スレイラーなど、著作は多岐にわたる。また、International Association of Media Tie-in Writersの代表者であり、『Weird Tales Magazine』の編集者も務めている。著者の詳細についてはJonathanmaberry.comを参照。